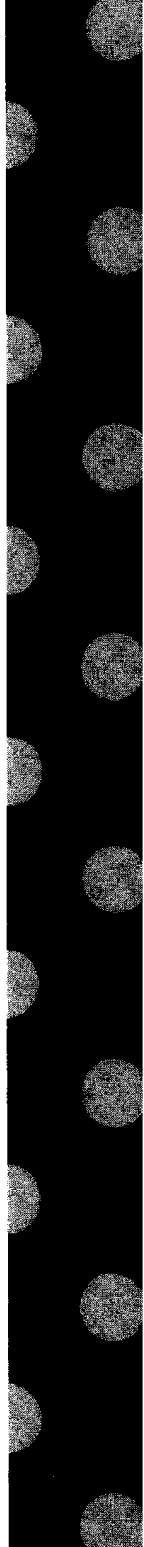


北川歩実

新潮社



●新潮ミステリー倶楽部特別書

がわあゆみ) ●発行者・佐藤亮一

東京都新宿区矢来町71/振替〇〇一

266) 5411・読者係03(32

社●製本所・大口製本印刷株式会社●価

・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お
替えいたします。

●発行・1995年6月20日

© Ayumi Kitagawa 1995, Printed in Japan

下ろし ●僕を殺した女 ●著者・北川歩実(きた

●発行所・株式会社新潮社・郵便番号162

四〇一五〇八/電話・編集部03(3

66) 5111 ●印刷所・株式会社精興

格はカバーに表示してあります ●乱丁
送り下さい。送料小社負担にてお取

●3刷・1995年7月20日

ISBN 4-10-602740-2 C0393

僕を殺した女

装画
マーク・コスタビ
装幀
平野 甲賀
新潮社装幀室

まただ。

目を開ける前から、覚醒した意識が異変を知らせていた。昨夜も、ベッド以外の場所で眠り込んでしまったらしい。目を閉じたまま、枕がわりになっていた右手を頭の下から引き出したとき、手の甲にちくちくとした刺激を感じた。居間のカーペットの上に寝ているんだな、とぼんやりとした意識の中で考えた。足を伸ばすと、なにか棒状の物が膝に当たった。テーブルの脚のような感じだ。こんなところにテーブルがあったかな、とこれもぼんやりと半分眠った状態で考えた。どうしてこんな場所でこんなふうに眠っているのか、全然覚えていなかった。昨夜の出来事を忘れているというのは、これで何度目になるだろうか。ここにこうして眠った、その記憶がない。馴れているからそのこと自体に対する戸惑いはないが、記憶の抜け方が、だんだん

性質が悪くなっている。

背伸びするように動かし手の先に、ガラスの瓶が触れた。その瞬間、再び睡魔に誘われかかっていた意識が、覚醒の方に向かいだした。

頭を動かしてみた。頭皮に、痺れたような嫌な感触がある。その痺れの位置を確かめるように指先を後頭部に這わせながら、薄く目を開いた。最初に目に入ったのは、緑色のカーペットだった。視線を少し上向きにして、転がっている瓶を見つけ、手元に手繰り寄せる。ウォッカの瓶だ。中身は、ほんの一滴が残っているだけだ。僕が飲んだのだろうか……記憶を辿ろうとしたが、すぐにあきらめた。これまでの経験から、無駄だと分かっていたのだ。

ウォッカの瓶をカーペットの上に転がした。溜め息が出た。こんな強い酒を一本空けてしまったというのか……僕はいったいどうしてしまったんだろう。酒はもう飲まないと決めたはずだし、実際に飲んでいないつもりでいるのに。酒を飲んだという記憶もなく、買ってきた記憶もないが、事実ここに酒の空瓶がある。しかも、こんな経験は今日が初めてというわけではなく、このところ立て続けなのだから恐ろしい。

「なんでこんなことになるんだ」そう呟きながら起き上が

った。そしてゆっくりと首を回し、部屋を見渡した。背筋をひやりとした汗が伝わった。

「なんでこんなこと」

今度は呻^{うめ}いていた。

ここは、自分の家ではない。カーベットの色は、自分の家の居間と同じグリーンだったが、微妙な色合いが違っている。

「いったいここはどこなんだ」

僕は軽い眩暈^{めまい}を覚えながら呟いた。

壁には、ぎっしりと本の詰まった棚がいくつも並び、その隙間の僅かな空間に、風景画と抽象画が一枚ずつ縦に並べてある。部屋の角のエアコンの下には、衣装箆^{はら}、別の角に、大型のテレビとビデオ、それにワープロだかパソコンだかのキーボードと画面、大きなクッションにも見えるソファ。そのすべてが、初めて見るものだった。

小鳥の鳴き声が聞こえる。窓に掛かったカーテンが透けていて、その向こうに鳥籠があるのが見えた。それもまた、馴染みのない光景だった。部屋には、とりあえず僕一人で、他の人間の姿はないが、ここが誰か他人の住む部屋であることは確かだ。僕は惴然とした思いにさらされていた。

身体の横の小さなガラステーブルの上に、ナポレオンの

ボトルがある。これも中身は空だ。誰が飲んだのか……僕だとは限らない。さっきのウォッカも、飲んだのは僕ではないかもしれない。しかし、だからといってほっとした気分になれたわけでは、もちろんない。昨夜の記憶がないことには変わりはないのだ。酒を飲んだにしろ、飲まなかったにしろ、僕はまた記憶喪失を経験した。そして、誰ともしない人間の部屋で、一夜を明かした……これは初めての経験だった。

ひどい寒気を背中に感じながら立膝の姿勢になった僕は、テーブルのガラスの下に丸まっているチェックのスカートと、パンティストッキングを見つけて、また驚いた。

ここは女の部屋なのか？ 困惑がいっそう募ってくる。テーブルを支えにして立ち上がった。足はよろけるし、頭の芯が重い。それに、他人の部屋に知っていることを知ってからは、息苦しさを覚えている。しかしその一方で、胸に湧いている感情がどこかしら他人事^{ひとこと}のようで、切迫感がない。酒が残っているのか、意識に靄^{もや}がかかっている感じが拭えず、思考はぼやけ、ふわふわとした夢の中のような感覚が全身を包んでいるせいだ。

顔を洗おうと、洗面所を探して、辺りを見回し、「ん？」と思わず呟いた。

部屋の絨毯、家具、キッチン調理器具、テーブル、いずれにも全く見覚えがないのだが、部屋の形や天井の高さ、間仕切りの構造や流し台の位置や形までもが、奇妙な程僕の部屋の様子と一致している。一瞬、ここは自分の部屋で、家具が入れ替えられただけではないのか、という錯覚にとらわれた。が、むしろそんなはずはない。造りが似ているだけだ。僕の部屋は取り立てて特徴のない造りだ。そっくりの構造をした部屋があっても少しも奇妙ではない。僕はそんなふうになんて思ひ、廊下に出た。

僕のマンションの部屋は、キッチンの板張りとながら廊下の奥に扉が二つあり、その向かって左の壁の扉がトイレとバスになっている。扉の数とついている向きはここも同じだった。

廊下の突き当たりの扉が、半開きになっている。僕のマンションの場合は、そこは寝室だ。ここはどうだろうか。そう思って奥に歩き、僕はふと、足を止めた。人の呻き声が聞こえたのだ。僕は緊張感から身体を固くしながら、足音を忍ばせて、突き当たりの半開きの扉の向こうを覗いた。ここもまた僕のマンションと同じで、寝室だった。薄暗い部屋の中に、ベッドがあった。その上に、人が寝ていた。裸の背中と縞のトランクスが見えている。顔は向こう向き

だったが、明らかに男だと脛毛で分かる。

片脚の膝から下をベッドからはみ出させ布団を半分床に落としている。男は、ひどく寝苦しそうで、数十秒の間に何度も手足をばたつかせ、喉から絞り出すような呻き声を時折洩らしていた。僕は扉の隙間から目を離した。顔は見えないが、後ろ姿の雰囲気から、全く知らない男だと判断できた。そのせいか、ますます頭が重くなってきて、胸もむかつき始めた。

……なんてことだろう……知らない男の部屋で泥酔するなんて、不気味な事このうえない。もし、相手がホモだったりしたら……そんなことまで脳裏をよぎる。だが、感覚が鈍麻しているのか、当惑がひどくなるはずが、妙な落ち着きを取り戻し始めている。思考力は確実に働きはじめているのだが、意識の表面に被膜でも貼りついているように、どこか現実の世界との接点がぼやけている。生々しい夢を見ている時のような感じだった。実際、これは夢なのかもしれないと、本気でそう思った。酒に酔い、記憶をなくす。そこまでは経験済みだ。しかし赤の他人の部屋で目を覚ますなんて……そんなことにはだけではないようにと、恐れていた出来事そのものではないか。恐怖感が悪夢を生んだのだ。悪夢はいつも生々しく、まるで現実のような感覚が

ある。今がそうなのではないだろうか。

僕は、もう一つの扉を開けた。これも僕のマンションと同じで、バスとトイレだ。しかも、バスタブやシャワーの形も馴染み深いものだった。ここまで共通しているのは、さすがにおかしい。これはやはり夢ではないか。夢の中に、少しだけ現実を歪めた形で自分の住まいが出現しているのではないか。そんなことを思いながら、洗面台の蛇口を捻り、水に両手をさらした。身を切るような冷たさが全身に伝わり、意識の周囲の被膜が少しずつ剥がれていくのを感じる。それと同時に、やはりこれは夢ではないらしいと、次第にそう考えざるを得なくなり、当惑が確かなものになってくる。

なぜこんなことになったのだ、とようやく現実との接点を取り戻しつつある意識の中で考えた。

一時的な記憶喪失は、最初の酩酊と共に経験した。限度を知らず泥酔して、記憶を失うというのは、珍しい話ではないだろう。最初は笑い話ですんだ。記憶を失うとはこういうことなのかと、いい経験をしたと思ったくらいで、記憶の喪失という出来事を僕は楽しんですらいいた。ひどい二日酔いも全然苦にならなかった。頭に染み付いて取れないように思えた苛立ちや苦悩が、泥酔の記憶とともにすっか

り洗い流されてしまっているような、ある種の爽快感が、二日酔いのなんともいえぬ重苦しさの中に伴われていたのだ。僕はその気分が味わいたくて、毎夜痛飲し、泥酔して眠った。大抵の場合記憶の喪失は、泥酔した後に見われて眠る。ほろ酔いの頃までの記憶は、はっきりと残っていた。しかし、いつの頃からか、記憶にない時間が長くなり、そのうちに、どこで飲み、どうやって家に辿り着いたのか、そもそもの初めから記憶のかげらすらもないということが、時折起きるようになった。その頃から、僕は不安を覚えるようになった。あるときは、泥まみれで寝込んでいる自分を発見した。記憶にない数時間に、どこでなにをしてきたのか。背筋がずっと寒くなるような目覚めだった。

それ以来僕は、酒はきっぱりとやめた。自分の正気の部分では、確かにそう決めて実行した。繁華街に出ることはやめ、家に酒を置くこともやめた。ところが、相変わらず記憶の喪失が繰り返されている。それもひどいことには、酒を口にしたその瞬間の記憶すらないのだ。ふと気がつくと、寝ている自分を発見する。部屋に転がっているビールやワインの瓶を目にして、僕はただ当惑するしかなかった。無意識のうちに外出し、酒を買い、家に戻り、泥酔するまで飲んでいる。気持ちの悪い話だし認めたくないが、他に

考えられない状況なのだ。しかし、いつも目覚める場所は自分のマンションだった。泥酔時も理性が残っている証拠だと、そう思って、せめてもの慰めにしていたのに、僕は遂にその理性も捨て去ってしまったらしい。

ひどく惨めな気分に見舞われながら、掌に水を溜めて、顔を洗った。

そのとき、僕はひどい違和感に見舞われた。

顔に滴る水を慌てて指先で払いのけて、鏡を見た。

女の顔が映っている。長い髪、綺麗な女だった。僕は、ぎくりとして、慌てて振り向こうとした。その僕と一緒に、鏡の中の女が、首を回している。僕はひどくうろたえた気分になり、再び鏡に向き直った。そしてもう一度背後に、今度はしっかりと視線を向け、誰もいないことを確かめた。

また鏡へ向かう。

女が、僕の気持ちをそっくり伝えるみたいに、ぽかんと口を開け、僕を見ていた。

僕はもう一度顔を洗った。そして改めて鏡を見直し、右手でほったをつねった。女も、それに合わせてほったをつねっている、左手で。僕は、タイルの上にながみ込み、浴槽に水を溜めた。そこに自分の顔を映してみようと

思った。なにか仕掛けがある鏡なのだ、だから変な事がおきる、水なら間違いない、などと理性的に考えたわけではなく、咄嗟に出た行動だった。僕は浴槽に十分水が溜まるのを待ち切れず、首を突っ込むようにして中を覗こうとした。そのときに、肩からはらりと落ちてきた黒髪が僕の頬に絡んだ。

なにごとなのか、どんな冗談なのか、と僕は頭に手をやった。そうだ、と思いつく。長髪のかつらだ。こんなものをかぶっているせいで、鏡の中の自分を女と間違えたのだ。笑おうとした。けれども、そんな簡単なことではないということは、本当はもう、分かっていたのだ。笑いは口元に凍り付いた。僕は髪を引っ張って、それが自分の頭皮にしっかりと根付いていることを確認した。それから、僕は初めて、自分の異様な姿を意識した。セーターの下胸が膨らんでいる。僕は恐る恐る両手を胸に這わせてみた。コレハボクノムネデハアリマセン、と掌が脳に伝える。それに逆らう胸からの伝達。コレハボクジシンノムネデス。二つの刺激が拮抗する。

僕の心は拒否していたけれど、やっぱりそのふくよかな胸は、僕以外の誰の物でもなかった。

セーターを脱いでみた。ブラウス……とでもいうのだから

うか、ともかく男はあんまり着ないような襟元の派手な白いシャツも脱いでみて、僕は驚いた。といっても、とくにふだんの驚きの次元を超越していたから、驚きの中での戸惑いともいったほうが、そのときの感情には相応しいかもしれない。僕は、念の入ったことにブラジャーまでして、下半身の方は、これも明らかに女性ものの下着を着けている。

僕はブラジャーを外した。お椀型のふくよかな……女性にとってはどうかは分からない、太きすぎることはないかもしれないが……男にとっては大きすぎる胸……というか、乳房が、姿を現わした。

僕はへなへなとタイルの上に倒れ込んだ。そして横たわった姿勢でパンツ……パンティ……の中へ手を滑らせた。恥毛に触れたところまでは良かったけれど、その先には、あるべき突起物がなくなっていた。つるんとした手触り、という表現はもちろん当たっていないけれど、気分的にはそうだった。あらゆる意味で、この身体は女だった。壁に手をつけて立ち上がり、よろめきながら、鏡に向かった。女の顔が映る。今はもう、鏡が間違っているとは思わない。間違いがあるとすれば、見ている自分の方だ。鏡の中の女の顔は、口紅がついているのだろうか、唇は濃いめの赤で、

目鼻立ちはくっきりしていて、顎のラインはすっと尖っている。髪はロングのストレート。さらさらした美しい毛質だ。肌の色はかなり白く……それだけが僕と同じだった……。これが今の僕の顔だった。女の身体になってしまった、というよりは、他人の身体になってしまった、という方が正しいだろう。

僕は恐慌に襲われていた。大声で叫んで、暴れ回りたい気分だった。そんな衝動を押しとどめていたのは、状況があまりにも現実離れしていたせいだ。夢の中にいるときか思えなかった。ほったの痛みも夢なのだ。

僕は洗面台に両手をつき、夢なら覚めろと、意識を凝らした。けれどもそうすればするほど、これは夢ではない、現実なのだという確信の方が強くなる。こめかみが疼いた。動悸が激しい。呼吸が苦しくなり、膝がカタカタと震えた。恐慌に襲われている意識が自分だとは分かっている。しかしこの恐慌に反応しているこの身体は、いったい誰なんだ。僕は頭を抱え、目を閉じた。他にどうしたらいいのかわからない。ひたすら夢なら覚めろと念じた。そして目を開け、鏡を見て衝撃を覚える。僕は女になってしまった。目を閉じ、念じ、目を開き、女を発見する。それを何度も繰り返すうちに、これが夢ではないという確信はさらに深まる。

そしてその分、我が姿を見て受ける衝撃も増していく。そのため、恐慌状態は少しも薄れることなく持続した。

また目を開け、そして最初に見たときと同じくらい、また驚愕している。もう一度目を閉じようとして、ふと、奇妙な思い付きをして、バスルームを飛び出した。

僕の身体が女に変身したのではなく、誰かと心が入れ替わったのではないか、そう思ったのだ。

『転校生』という大林宣彦監督の映画の事を思いだしていた。

小林聡美の演じる少女と尾美としてのり演じる少年の心が入れ替わり、少年は少女の身体に、少女は少年の身体になっってしまうという話だった。あれはもちろん、お話の中だけのことで、現実には有り得ないことだとは、子供でも知っている。けれども、今現実には、僕は女性の身体の中にいる。映画にそっくりな状況が起きているのだ。ベッドにいた男、あれが自分ではなかったのか。見知らぬ男、とさっきは思ったけれど、自分の寝姿も、自分の後ろ姿も、僕は一度も見たことがない。

ベッドルームまで走った。そして、ベッドの上の男の身体に跨がるみたいにして、その顔を覗き込んだ。ふっくらした感じの輪郭……それは僕の輪郭に近い……鼻梁は高い

が、少し広がり気味の鼻、太めで下がり気味の眉、^{いびき}軀のもれている薄い唇、僅かに伸びている髭……そのどれもが、僕の知っている僕の顔とは違っている。

男が、ひきつったような息の吸い込み方をした後、激しく咳き込んだ。それをきっかけにしたように軀が止んだ。男は、ベッドについた僕の腕の間で身じろぎし、「うーん」と唸^{うな}って薄目を開けた。そして、はっと目を見開いて、「うわっ」と声を上げた。身体をずり上げ、ベッドの手摺に頭を思いっきりぶつけた。それなのに、彼は全然痛そうな素振りを見せず、びっくりした顔のまま慌てて起き上がり、ベッドから転げ落ちた。そこで毛布を拾い上げ、半裸の身体に巻き付けた。

「き、君は……誰」

男は、うわずった声で訊いた。

僕には答えようがなかった。心は僕、篠井有一だ。でも身体は？ それを知りたいのは、僕の方だった。

「昨日のこと、覚えてないかな」

僕はそういった。自分の声が鼓膜に届いた。その声には、聞き覚えがある気がした。僕には、はっきりした変声期がなくて、よく、オカマみたいな声だと言われた。それで、人前ではかなり気を遣って、努めて男っぽい声を作ってい

た。しかし、ふだんの声は、女性の声にも聞こえかねない。その声と、今、赤の他人の身体の中で喋っている自分の声の印象は、極めて近かった。

「昨日……」

男は、ぼさぼさの髪のをかきむしった。「やけ酒を飲んで……一人でだよ、一人で……それから……覚えてないんだ」

そういった後、彼は、毛布を身体から離し、自分の股の方に視線を向けた。

「もしかして……」

男は、青褪^{あおざ}めた顔で僕を見て、すぐに視線をそらし、それから宙を見据えるみたいにして、唇を震わせた。

「覚えてない」

そういつてから、激しくかぶりを振って、「責任逃れをしようっていうんじゃないんだ。ほんとに覚えてなくて……でも、もしそうなんだとしたら……そのう、責任だつてとるし、あのう、それで、やっぱり、あれだよね」

男は、すっかり混乱している様子だった。

「僕が誰だか知らないってこと？」

僕の問いに、男は、いくらかためらってから、頭を下げた。

「ごめん、昨日……僕、酔って出掛けたのかなあ……それで君と会って……」

「ほんと？」

「いや、記憶にないけど……ほかに……ごめん、教えてくれ。なんで君は、ここにいるんだ」

「僕、誰だか分かる？」

男は、激しく首を振った。

「知り合い？ そうだったけ？ 僕、変になったのかなあ。あんなに飲んだの初めてで、記憶をなくしたのも初めてで、僕、なにをしたの君に」

男には、嘘をついている様子はいかがえなかった。

「あんた、男だよな」

男は、えっという顔をした。僕は、彼の身にも僕と同じ……逆の……変化が起きてるんじゃないかと思って、いった。

「鏡、見たら」

男は、パンツの前を隠すみたいにして、立ち上がり、箆^{へら}に裏返して載せてあった鏡を手にして、覗いた。

「どう」

僕は訊いた。男の表情には、戸惑いがあった。けれどもその奥にある感情は、僕が鏡を見たときの感情とはまるっ

きり違っているようだった。彼は、自分の姿形に驚いてはいなかった。

「男らしくない。そういわれるのも当然だよ。うん、ほんとにごめん。そのう……記憶に残ってなくても、そのときには、意識があった。僕がそうしたんなら、それは間違はなく僕の責任で、それに、そのときにはちゃんと、判断力もあったはずで、僕は、そのう、なんていうか、君の事が好きでそうしたというか……」

男はうつむいて、いった。「責任取るよ」

「僕がこうなった責任？」

「う……うん」

どうなったと思っているのだろう。責任が取れるものなら、取ってほしかった。

「本当に、この身体が誰のものだか知らないんだね」

僕は、自然な事として男の口調で話していた。彼にしてみれば、それに対する違和感があったはずだが、混乱しているのと、今の状況から、妻まれていると勘違いしたようなところが見えた。

彼は、おどおどとしていった。

「少し、落ち着かせてくれないかな」

彼は、頭を抱えて寝室を出て行った。

僕もその後について、リビングに行った。彼は浴室に行つて、顔を洗っている。僕は、思いを巡らせていた。彼の様子からして、言葉に嘘はないように思えた。彼はこの女を知らない。どこの誰なのか、なぜ自分の部屋にいるのか、全然知らないようだ。彼の想像する通り、外で飲んでいて、知り合つて連れてきた、そういうことだろう。まさか女が見ず知らずの男の部屋を勝手に訪ねてきて、勝手に上がり込むなんてことは到底有り得そうにないからな、などと僕は奇妙なくらい冷静に考えている。ついさっきまでの混乱が嘘のようだった。すでに感覚が麻痺していたのかもしれない。

男がリビングに入ってきた。スウェットの上下を着ている。彼は、僕を見て慌てて目をそらした。

「なにか着てくれないか。目のやり場がなくて」

僕は、パンティ一枚という格好だったのだ。

彼は、僕が風呂場に脱ぎ捨てていたブラウスとブラジャー、セーターを重ねて持って来た。僕はそれを受け取ったが、身に着ける気にはならなかった。

「そういうのがいいな」

僕は、男の着ているものを指差した。

男は、奥の部屋に入り、そこから洗いたてらしいＴシャツ

ツとヨットパーカー、パイル地のズボンを投げて寄越した。できれば男物のブリーフが欲しかったが、この身体には異様だろう。僕は完全に開き直っていた。

シャツを着て、ズボンを穿く。

「着たよ」

姿を現わした彼は、疲れた表情をしていた。

「逃げるつもりはない。だから、話してくれないか、昨日のこと。言い逃れはしない」

「まずはあんたから。覚えてるところまで話してよ」

男はうなずいた。

「昨日は、昼間から酒を飲んでた」

「やけ酒っていったよね」

「うん」

「なぜ」

「それは……」

「いってよ」

「片思いだった人が結婚した。一言も思いを伝えられなかったことが、情けなかった……でも、それで誰でも良くて君と、なんて……そんなことはない……と、思う」

「昼間から飲んで、それで？」

「夜、七時頃かな、酒がなくなつて、ウイスキーを買いに

いった。帰ってきて、また飲み始めた。そこまでは覚えてるんだけど、後はもう」

「それって、よくある事？」

「とんでもない。記憶をなくすほど飲むなんて、初めてだ」

「外に飲みに行ったかどうかくらい、分からないのかなあ」

「行っていないと、思うんだけど……でも、そこで君に……会ったんだよね」

僕は、首を横に振った。

「違うの?!」

「覚えてない」

「え」

「実は僕も、覚えてないんだ」

男は、啞然とした顔で、僕を見ていた。

「君も相当酔っ払っていたんだろうね」

男は、カップに珈琲コーヒーを注ぎながらいった。「よくあるの、そういうこと？」

「どうか」

僕も、この女にそれを訊いてみたい。

「どこの店で会ったのかなあ」男は、カップを両手に持ち上げながらいった。

「どこだろう」

「それもわからない。同じだね、僕と」

男は、僕の前にあるガラステーブルにカップを置いた。

「君、名前は」

なんだろうか。篠井有一と名乗ったら、頭がおかしいと思われるだろう。

「別に、言いたくなければ、いいんだ」

「京子」僕は思い付きでそう答えた。

「きょうこ……どんな字」

「京都の京」

男は、何か考え込むような表情を見せた。「京子……さなか」

「そう」

「僕は、宗像久。珍しい名字だろう」

パソコンの画面に『宗像久』という文字が現われた。

「君、名字は」

「鈴木」

これも思い付き。宗像がキーボードになにやら打ち込むと、『鈴木京子』という文字が画面の端に点滅した。

「これで、アドレス帳に登録される」

画面をたくさんさんの名前と住所、電話番号などの文字列が埋めた。

「不思議な出会いだけだし、お互いなんにも知らないままっていうのも、変だよな」

彼は自己紹介をした。二十五歳、独身、大学院で数学を研究している、といった。なるほどと思った。なんとか積分だとか、微分幾何だとか聞き慣れない用語が題名になった本が書棚を埋めている。それが、数学の本だってことぐらいは僕にも分かる。

「で、君は？」

もちろん彼の自己紹介は、この質問のためになされたのだろう。

「学生？ OL？」

「身元調査でもするつもり？」

「そういうつもりじゃあ……」

「関係ないんじゃないかな。なにやってようと」

宗像の頬がぴくりと震えた。彼は頭を掻き、僕から離れて、珈琲を啜りだす。機嫌を悪くしたみたいだった。僕はちょっと考え直した。今のこの事態に、彼は無関係と言いつけるだろうか。完全に拒絶してしまうのもまずい気がする

る。

「高校生だよ」僕はいった。

「え？ 冗談だろう」

「いいや」

僕は大学の一年生だ。この身体を持ち主が何歳で、何者なのかは知らない。

高校生といったのは、彼との距離を保ちたかったからだ。女子大生なら遊びですんでも、高校生では……少しは、自制しようとするんじゃないかと僕は思った。この女の顔も、身体も、若さは感じられる。僕の印象では二十から二十五十七、八でも、そうおかしくはない。案の定、宗像は真にうけた様子で、困ったような顔をしていた。

「ほんとに？」

僕はうなずいた。

宗像は、喉の奥を鳴らした。こもった音が洩れてくる。

「家に、電話したほうがいいんじゃないかな。心配して、

警察に連絡してないとも限らないし」

「いいよ」

「かけたほうがいい」

「別に、あんたを困った立場に追い込む気なんかないよ」

「かけたほうが……」

「僕のためみたいにいわないでくれないかな。要は、あんたに迷惑が及ばなければいいんだろう。あんたに無理やり連れ込まれたなんていわないよ。それでいいんだろう」

宗像は、少しむっとしたみたいだった。それでも言い返しはせずに、コードレスの電話を僕に手渡した。

「どこにかけろっていうのさ」

僕は、一人暮らしだ。実家は山梨県で、高校からは東京にいる。十五、年齢の離れた姉と二人でマンションに暮らしていたのだが、姉は今、病院に入っている。外泊しても、誰も心配はしない。

「君……ひょっとして……家出てきたとか」

「……そうかもね」

宗像は、困惑した様子だった。

「あんたに迷惑かける気はないよ。そういつてるだろう」

宗像は、表情を変えずにこちらを見ていた。

僕は尿意を覚えて、立ち上がった。

「トイレ行ってくる」

そういつて便所に行き、ズボンをずらした。そうしてから、引っ張り出すべきものがないことを思い出し、便座に座った。尿がちろちろと伝い落ちる様を、僕は感じていた。終わってから、トイレットペーパーを手に巻き取る。拭く